

【追悼】

高木定夫先生を悼む

日本熱測定学会名誉会員で、近畿大学名誉教授高木定夫先生が昨年 11 月 1 日に 81 歳でご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生は近畿大学理工学部を退職されるまで、溶液状態の熱力学的研究の分野で指導的な役割を果たされました。

先生は昭和 7 年神戸市で誕生され、神戸大学理学部化学科から大阪大学大学院仁田勇研究室で関集三先生の師事を経て、大阪市立大学の助手として勤務されました。大阪市立大学では藤代亮一先生の研究室で気-液平衡装置を製作され、溶液論の基本である溶液を構成する分子の形状および大きさの効果を明らかにするため、高精度で Gibbs エネルギーを決定されました。エンタルピーと合わせてエントロピーを決定し、過剰熱力学量からベンゼンとその 2 量体であるピフェニルに続く 3 量体テルフェニルについて明らかにされました。これは大阪大学で、グリイシンの α 結晶の蒸気圧測定から結晶中でのプロトン移動、プロトントランスファーのエネルギーなどを研究されており、その延長線であり、精密な方法論で溶液状態への解析のチャレンジであったと思われます。またパストゥール以来の光学活性酒石酸やアラニンなどのヘテロキラル水溶液の混合エンタルピーを世界で初めて評価されました。世界の化学熱力学のリーダーであった英国の McGlashan 教授がキラル fenchone の系のエンタルピーを測定し、発表された時すでに 13 年も前に日本人が研究発表していたことを見つけて、驚いたとの話もつたわっております。また水溶液集での環状オリゴ糖でありますシクロデキストリンとアルコールとの包接現象の解明では精密なエンタルピー測定から包接の原動力はエントロピーであると見出されました。当時の分子包接現象はエンタルピー的安定化によって生じるとの対峙するスペクトル測定を主な研究手段とするグループと論戦を繰り広げられました。先生の方法論はホストのシクロデキストリンとゲスト分子のみの系で測定されており、支持塩や色素などを共存させる間接的な方法でないこと、厳格な直接的熱力学量の精密測定の結果であったことから、多くの支持を得、現在は分子包接にエントロピー主導の市民権を得ている。この功績により平成 19 年シクロデキストリン学会賞を受賞されました。

平成 12 年 11 月には近畿大学において日本熱測定学会第 36 回熱測定討論会を開催され、355 名の参加を得ました。平成 2 年には第 2 回日中合同熱測定シンポジウムを菅 宏



組織委員長のもと、実行委員として近畿大学で開催されました。

また学内では色々の役職を歴任されましたが「高木先生は損得を考えずに、何が客観的に正しいことなのかをいつも冷静に考え、理路整然と意見を展開されたのであります。私達はこれによってどんなに助けられ、勇気づけられたことかは言うまでもありません。高木先生のような心豊かな人に出会えたからであります。先生の存在は若いころの私には生きる希望にもなっていました。」という御退職の折の来賓の挨拶にもみられるように淡々とした理系の学者道を進まれました。

先生は研究とともにその生き方においても、慎重で緻密であることを心がけ、その暖かいお人柄からで 400 名を超える多くの若者たちが薫陶を受け巣立っていきました。多忙に押されて、先生が退職されてからは名誉教授としての行事に時折参加され、その折にお会いすることが主でありましたが、同窓生が自宅に押しかけ、色々のところに一緒に出掛けられたことをうかがっております。この近畿大学での教育研究の業績により、平成 22 年秋には瑞宝小綬章を受章されました。

ここに先生のご高徳を偲び、生前たまわった数々のご厚情と有益なご教示に深く感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

(近畿大学 木村 隆良)